

普門寺（豊橋市）の文献調査について

愛知県立大学中世史研究会

はじめに

二〇〇八年度以来、愛知県立大学中世史研究会を中心として、普門寺の文献調査を行ってきた。すでにおよその作業を終え、目録も公刊した。目録と原本との照合・再確認が続けているが、一段落したといえる。豊橋市美術博物館では、二〇一七年一月に、考古学・美術史学・建築史学の調査成果とともに、企画展「普門寺と国境のほとけたち」が開催され、文献調査の成果も、地元はもとより全国に発信することができた。

この調査は、愛知県史編纂事業による調査に上川通夫（日本文化学部教員）が加わったことを発端とするが、愛知県立大学中世史研究会がそれを受け継ぎ、悉皆調査として再スタートしたものである。この間、日本文化学部歴史文化学科の専門科目「歴史文化学演習」（上川担当、中世史ゼミ）の受講生を中心とする愛知県立大学中世史研究会が調査に携わってきた。また、学部には附置されている文字文化財研究所とも関わって、調査成果を公表したこともある。

そこで、愛知県立大学中世史研究会の立場から、普門寺文献調査の経緯と成果の記録を、本誌に掲載させていただく

ことにした。大学で取り組む学術調査の事例を提示することで、その意義や方法が検討され、これからの取り組みの参考にできる課題抽出につながることを願いたい。あわせて、普門寺からの新出史料を目の当たりにして、愛知県域に包蔵される文化遺産の豊かさについて、生活者住民の目線で、しかも人類史上の普遍価値の発見として、共有する手がかりにしたい。

調査については、普門寺ご住職林隆清様には、当初から一貫して格別のご配慮をいただいている。あらためて感謝申し上げます。

なお、「はじめに」「一」「むすび」の執筆は上川通夫、他は各項目の末尾に執筆分担者名を記した。

一 調査のきっかけ、経緯、成果

愛知県立大学中世史研究会による普門寺文献調査は、それ以前からの学術動向を受け継いでいる。

二〇〇四年、豊橋市教育委員会の岩原剛氏らが普門寺旧境内の調査を開始され、遺物の表面採集や平場の確認ののち、順次必要箇所を発掘された。その際、愛知大学史学科日本史専攻会考古学部会による『船形山城跡測量調査報告書』（一九九三年）が参照されたという。二〇〇七年一月、愛知県史編纂事業の調査として、山田邦明氏（愛知大学）が普門寺で永意起請木札を実見され、年号部分を含む上部欠失の状態ながら、文字の書風などから平安時代のものであると推定された。ついで愛知県史編纂事業の古代史部会に属す上川が知らせを受け、『愛知県史 資料編7 古代2』に再録する目的で、二〇〇八年八月二十八日に初めて普門寺に赴いて起請木札を調査した。この時、ご住職から未調査の文献類がある旨のご教示があり、九月八日に再度訪問して、土蔵に多くの文献があることを確認し、調査を期して別置・保存していただいた（老朽化甚だしい土蔵はのちに解体された）。この間、起請を『愛知県史 資料編7 古代2』に翻刻し（二〇〇九年三月刊）、ほぼ同時に確認した新出の仁治三年普門寺領四至注文写木札や天文十一年本尊等造立記



歴史文化資料学での調査実習

木札などについて、『愛知県史研究』第十四号に紹介した(二〇一〇年三月刊)。なお二〇〇七年には、豊橋市教育委員会が普門寺旧境内を主に考古学的手法で確認調査するにあたって普門寺調査指導委員会を立ち上げ、二〇一〇年度から上川が加わった(二〇一六年三月まで)。

これを受け継いだのが、愛知県立大学の大学院生・学部生とともに実施した文献悉皆調査である。二〇〇九年三月二十六日から、まずは貞享元年(一六八四)、二年に勧進購入された黄檗版『大般若経』の調査に着手し、その後、聖教類や古文書などの調査を進めた。土蔵、護摩堂、位牌堂、客殿、収蔵庫などに分置されていたが、すでに何度かの入れ替えや整理の手が入っており、収納状態に特別の意味がないものがほとんどであった。そこで、調査の順序は特に原則を設けず、運びやすいものから順次手を付けていった。これらすべてについて、一点一点調査カードに必要データを記入し、中性紙封筒に収める、という作業である。なお、収蔵庫のガラスケースには、縁起や判物などの重書が別置されていた。棟札類も、多くはすでに収蔵庫に集められていた。

調査は、当初は一月ないし二か月に一回、夏休みなどには一泊または二泊して取り組んだ。主に在籍中のゼミ生が参加し、ほかにも関心をもった学生が手伝った。二〇一二年度までは、国庫補助を受けて総合的に普門寺調査を実施する豊橋市教育委員会から、旅費と日当を支給していただいた。大学院生井上佳美が調査



普門寺春祭りでの成果発表



学生自主企画研究による聞き取り調査

を主導し、黄檗版『大般若経』や『普門寺縁起』についての研究成果のとりまとめも行った。

また、二〇〇九年度からは、日本文化学部歴史文化学科の専門科目「歴史文化資料学（歴史）」（上川担当）の受講生が、実習として普門寺文献調査に関わった。前期に歴史史料についての講義と、扱い方の実習を大学で行い、七月末ごろに一日普門寺で実習させていただいた。ご住職はじめご家族のご理解とご配慮によって、二〇一七年度にも継続している。

この間、愛知県立大学教育支援センターの事業である「学生自主企画研究」に、愛知県立大学中世史研究会が応募・採択され、研究補助金を受給して調査・研究を行った。ただし、これは事業の趣旨にしたがった研究目的と計画を大学院生と学部生が立案しており、普門寺所蔵文献の調査と連動しつつも、独自の活動を行った。教員上川を責任者とする調査は、あくまで普門寺所蔵文献を対象とする全点確認の作業である。これに対して学生自主企画研究は、雲谷町や岩崎町をはじめとする普門寺を支えてきた近隣地域を対象に、歴史的な景観や伝承、民俗などを、檀家の方々への聞き取りを含めて、フィールド実践したものである。その成果は、教育支援センター編集の報告書だけでなく、独自に編集した『中世三河国普門寺領現地調査報告Ⅰ（豊橋市雲谷町編）』（二〇一一年）、『中世三河国普門寺領現地調査報告Ⅱ（豊橋市岩崎町編）』（二〇一二年）として結実し、関係分野の機関や研究者に送られた。前者については、専門学術誌『鎌倉遺文研究』第二八号（二〇一一年）に「新刊紹介」として取りあげられた（海老澤衷氏執筆）。大学院生服部光真による主導力が

發揮された。服部による研究論文も書かれた。

さらに、調査と研究の成果を、四月初旬に行われている普門寺春祭りにおいて、客殿で檀家の方々や拝観者にお話しさせていただく機会があった。二〇一一年・服部光真、青木千鶴、石原綾、深尾優子、松原亜矢、望月夏美、二〇一二年・服部光真、武野やよい、新美響子、服部あゆ美、二〇一三年・服部光真、二〇一四年・服部光真、井田美郷、佐藤路子、二〇一五年・服部光真、三村真穂、二〇一六年・上川通夫、が担当した。

二〇一六年三月に『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第140集 普門寺旧境内―考古学調査編―』『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第141集 普門寺旧境内―総合調査編―』が刊行された。後者の第二章文献調査「五、聖教・古文書目録」には、三段組み八〇ページ分にわたって調査文献の目録が掲載されている。愛知県立大学中世史研究会の調査成果が凝縮されたこの地味な目録に、ひとまず私たちは満足しつつも、研究基盤として活用されることへの期待に胸が膨らんだ。二〇一七年一月には、考古学、美術史学、建築史学、文献史学による普門寺総合調査の成果を踏まえた展覧会「普門寺と国境のほとけたち」が、豊橋市美術博物館で開催された。文献史料を数多く展示したことに特徴のあるこの企画展で、愛知県立大学中世史研究会は協力者として参加させていただき、企画担当の岩原剛氏ご指導のもとで、展示キャプションの執筆を担当させていただいた。

なお研究会では、普門寺文献調査から派生して、豊橋市の大脇新田戸田家文書や、石巻神社所蔵の『大般若経』（十四世紀末書写）などにも取り組み、それぞれ調査データを公表した。さらに今後の活動に意欲をもっているところである。以下、公表した調査成果を記す。あわせて参加した愛知県立大学中世史研究会のメンバーについても記録しておく。

(上川通夫)

【愛知県立大学中世史研究会による研究成果】

A 学生自主企画研究

①二〇一〇年三月「中世普門寺領の復原的研究―中世寺院と地域社会―」愛知県立大学教育研究センター『平成22年度



愛知県立大学中世史研究会の報告書と豊橋市教育委員会の報告書、豊橋市美術博物館展示図録

学生自主企画研究事業報告書

- ② 二〇一一年三月「日本中世村落史の研究―三河国岩崎郷を中心に―」愛知県立大学教育研究センター『平成23年度学生自主企画研究事業報告書』
- ③ 二〇一二年三月「弓張山系と中世社会―文化遺産の発見と創造―」愛知県立大学教育研究センター『平成24年度学生自主企画研究事業報告書』
- ④ 二〇一三年三月「大般若経Ⅱ地域史料論の構築―石巻神社（豊橋市）所蔵大般若経調査を通して―」愛知県立大学教育研究センター『平成25年度学生自主企画研究事業報告書』
- ⑤ 二〇一四年三月「三河地域史料の研究―文化財の発見、歴史文化の再発見―」愛知県立大学教育研究センター『平成26年度学生自主企画研究事業報告書』
- ⑥ 二〇一五年三月「三遠国境地域における地域歴史遺産の創造」愛知県立大学教育研究センター『平成27年度学生自主企画研究事業報告書』

B 学生自主企画研究の継続研究

- ① 『中世三河国普門寺領現地調査報告Ⅰ（豊橋市雲谷町編）』二〇一一年三月
- ② 『中世三河国普門寺領現地調査報告Ⅱ（豊橋市岩崎町編）』二〇一二年七月

C 派生した研究

- ① 「大脇新田戸田家文書目録・解題」「愛知県立大学文字文化財研究所紀要」第一号（二〇一五年）。近世前期に渥美郡

雲谷村から分村した新田村落の庄屋家文書五四一点を目録化。

② 瑞浪市文化財調査報告書第3集『櫻堂薬師所蔵文書等調査報告書』（二〇一五年、瑞浪市教育委員会）。原本校正を担当した。

③ 愛知県立大学中世史研究会・愛知大学地域史研究会編『石巻神社所蔵『大般若経』調査報告書』（二〇一六年、豊橋市美術博物館）。十四世紀末の書写経典すべてについての詳細なデータを採用・記録し資料編として公開した。論考として上川通夫「石巻神社『大般若経』への歴史的道程」、服部光真「石巻神社『大般若経』調査の課題と方法」「石巻神社『大般若経』をめぐる地域社会史」を含む。

D 目録完成と博物館展示への結実

① 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第14集 普門寺旧境内―総合調査編―』（二〇一六年三月、豊橋市教育委員会）第二章文献調査「五、聖教・古文書目録」に史料目録を掲載した。一部の史料翻刻と考察を上川と服部が分担した。なお『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第14集 普門寺旧境内―考古学調査編―』が同時に刊行されている。

② 豊橋市美術博物館企画展「普門寺と国境のほとけ」（二〇一七年一月～二月）の展示準備に協力し、キャプションを分担執筆した。

③ 同右展示図録「普門寺と国境のほとけ」（二〇一七年）の第二章「普門寺文書の世界Ⅰ―木札の世界―」、第三章「普門寺文書の世界Ⅱ―文書と聖教―」、第五章「普門寺の再生―僧・視深の近世復興事業」の解説を執筆した。

④ 豊橋市美術博物館企画展「大般若経展」（二〇一六年三月）に協力した。

⑤ 豊橋市二川宿本陣資料館の館蔵品展「古文書でたどる大脇新田のあゆみ」（二〇一六年四月～五月）に協力した。

【個別の論文・史料紹介など（普門寺文献を主対象にしたものに限る）】

① 上川通夫・井上佳美「史料紹介 普門寺（愛知県豊橋市）所蔵黄檗版『大般若経』について」（『愛知県立大学日本文化学部論集（歴史文化学教科編）』第一号、二〇一〇年）

- ② 井上佳美 「『舩形山普門寺梧桐園闔之縁起由来』についての基礎的考察」(『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第一号、二〇一〇年)
- ③ 上川通夫 「普門寺(豊橋市) 所蔵永暦二年永意起請木札について―付、大治二年『大般若経』零卷、仁治三年四至注文写木札、天文十一年本尊等造立木札―」(『愛知県史研究』第一四号、二〇一〇年。「三河国普門寺の中世史料」と改題して上川通夫『日本中世仏教と東アジア世界』二〇一二年、塙書房に再録)
- ④ 上川通夫 「平安末期の山林寺院と地域社会」(『愛知県立大学文字文化財研究所年報』第三号、二〇一〇年)
- ⑤ 上川通夫 「国境の中世寺院―三河国普門寺―」(上川通夫・愛知県立大学日本文化学部歴史文化化学科編『国境の歴史文化』二〇一二年、清文堂出版)
- ⑥ 服部光真 「普門寺(豊橋市) 所蔵年次不詳(中世後期) 三界万霊木牌について」(『愛知県史研究』第一七号、二〇一三年)
- ⑦ 上川通夫 「永暦二年(一一六一) 永意起請木札をめぐって」(『木簡研究』第三六号、二〇一四年)
- ⑧ 服部光真 「日本中世寺院史料と地域史研究―三河における史料調査から―」(『歴史の理論と教育』第一四三・一四四合併号、二〇一五年)
- ⑨ 服部光真 「中世三河国普門寺領四至再考」(『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第一六号、二〇一五年)
- ⑩ 服部光真 「中・近世移行期における普門寺の「復古」と三遠国境地域」(『地方史研究』第三七七号、二〇一五年)
- ⑪ 『愛知県史 通史編1 原始・古代』(二〇一六年、愛知県) 第十章第六節「院政期の仏教と地域社会」に「三河国普門寺」の項目を執筆した(上川通夫)
- ⑫ 上川通夫 「山寺における文字文化の形成と発見―三河国普門寺の文化遺産―」(『説話文学研究』第五二号、二〇一七年)
- 【研究会参加者】
- 〈大学院生〉 井上佳美 (二〇一〇年度博士後期課程修了)、服部光真 (二〇一四年度博士後期課程修了)、名倉ミサ子

(二〇一六年度博士後期課程修了)、加藤正賢、海老澤和子(以上博士後期課程在学中)、羽根田柁稀(博士前期課程在学中)

(学部生)石黒彩美、石本篤志、岩永夏希、小野田美雪、杉山由衣、鈴木麻惟、谷口和希(以上二〇〇七年度入学)、青木千鶴、安藤宏太、石原綾、加藤真子、中野健太、早川志緒里、原田真伍、深尾優子、松原亜矢、望月夏美、山田美咲(以上二〇〇八年度入学)、大野早希、武野やよい、新美響子、服部あゆ美(以上二〇〇九年度入学)、阿野裕介、井田美郷、倉知真由美、佐藤路子、杉浦公美、杉浦友香、竹中佐季、平野亜依(以上二〇一〇年度入学)、大澤慎也、加賀紀実、橋本侑季、濱口早耶乃、見田篤紀、三村真穂(以上二〇一一年度入学)、佐藤未奈子、澤田香南子、西川龍悟、羽根田柁稀、平賀彩絵、松井菜緒、森彩乃(以上二〇一二年度入学)、伊藤春城、今村智世、佐渡史絵菜、西田朱里、三澤瑛里(二〇一三年度入学)、岩田侑里香、長谷川奏、坂真里佳(以上二〇一四年度入学)、今井文理、金澤里菜、佐々木美聡、下條なつみ、玉野愛子、西邑渉、根崎智央、原田恭亮、渡辺正晃(以上二〇一五年度入学)

二 実物調査の実感

1 学術的実践としての普門寺調査—大学院生の立場から—

私が普門寺調査に加わったのは二〇一〇年からである。調査全体としては三年度目にさしかかっており、その成果の第一弾として上川通夫先生や井上佳美さんが中世木札や『普門寺縁起』、黄檗版『大般若経』について論考や史料紹介を出されていた。考古学的調査を早くから進められていた岩原剛氏の尽力も相まって、すでに普門寺の歴史的価値が認識されつつあり、文献調査についてもご住職のご理解の下に進められる条件は整えられていたのである。この年の春に普門寺に戻られた少壮気鋭の林義将副住職の存在も同世代として心強かった。



三界万霊木牌（表側）

この年から始まったのが土蔵や客殿に収納されていた文献史料の悉皆調査である。普門寺では指定文化財となっている仏像や、文献史料でも戦国大名の発給文書など一部の文化財は古くから注目されていたが、多くは顧みられてこなかった。今回は悉皆調査なので、近世、近代史料も含めたすべての文献が調査の対象となる。

悉皆調査も軌道に乗った二〇一二年一月二十一日、収蔵庫の片隅に集められていた近世、近代の棟札をまとめて調査することになり、二〇枚余りの棟札を調査場所の客殿に運び出した。全体を把握するために並べてみると、その中とりわけ古びた一枚に「暦応元年」の年紀があるのに気づいた。これが暦応元年（一三三八）銘「三界万霊木牌」である。三界万霊木牌としては現存最古級であり、しかも戦国時代に再利用した際に加筆された墨書から東三河の地域史に不可欠の資料であることが後に判明するこの木牌も、長らく近世、近代の棟札に紛れていたものであり、問題意識の伴った悉皆調査でなければ見出されることはなかっただろう。

近世聖教からも意外な発見があった。安永六年（一七七七）写「護摩幸聞記・神供幸聞記」の調書を採っていると、中に折紙が挟みこまれていた。調書の備考欄に注記するべく折紙を開こうとするも、虫損で容易には開かない。「開披不能」と済ませても許される程度ではあったが、どうしても気になって虫喰いを剥がすことにした。竹ひごで粘ること三〇分余り、ようやく開いたその折紙は永正七年（一五一〇）の年紀をもつ印信であった。また、近世の刊本『金剛界

『禮懺』の調査では、大治二年（一一二七）書写『大般若経』の断簡が表紙見返しへの補修紙に転用されているのも確認した。地域史や寺史の重要な内容を有する大規模史料群の全体像が立ち現れていったこと自体もさることながら、こうした個別の発見も悉皆調査の有する意義を私に認識させるに充分であった。

普門寺の調査は並行して他の調査にも展開した。中世の普門寺領だった地域については、学部生とともに「学生自主企画研究」として雲谷町、岩崎町、大脇町で古地名や史料調査を実施した。龍岩院所蔵棟札、大脇新田戸田家文書などがそこで新たに見出され、地域史料は着実に拡充した。これらの調査では地域の方々との協働も重視し、調査の願いから報告書刊行や報告会の開催など成果の還元に至るまで、社会的責任を感じながら学問に取り組む機会となった。普門寺調査は私たちにとっては貴重な学術的実践の場でもあったのである。

かくして私は一面では普門寺調査に研究者として育てられたとの自覚がある。様々な関係者のご協力のもとで迂遠で地道な調査を継続できたことは、今になっても得がたい経験であったと思ひ知らされている。そうした個人的な所感ほ措いても、普門寺所蔵文献の全体像が明らかにされ、諸研究の基礎条件が整えられたことの意義は小さからざるものがあると思う。これを本格的研究の出発点として、この成果がますますの拡がりをもって地域史や寺院史、中・近世史の研究進展に活用されることを期待したい。

（服部光真、二〇一四年度国際文化研究科博士後期課程修了、現在元興寺文化財研究所研究員）

2 調査の継承と普門寺展―学部生の立場から―

私たちが初めて普門寺を知ったのは、学生生活を謳歌しようと思気込む、入学して間もない頃であった。翌年には実際に足を運ぶ機会が訪れた。初めての現地調査であり心が躍った。史料調査が目的であったが、現場に立つとほかのことにも関心が逸れてしまう。住職方のご厚意によって本堂など境内を案内していただき、数々の貴重な仏像も拝観することができた。実際に肌で空気を感知取り土地柄を知ること、調査対象である史料への興味も今まで以上に湧いてく



仁王門垂木

意欲や基礎技術の獲得について、現場で実感することができた。

三年生で中世史のゼミに入ると、ちょうど企画されていた豊橋市美術館の展示「普門寺と国境のほとけ」への協力についてお誘いをいただき、いくつかの展示品キャプションを担当する機会に恵まれた。キャプション作成のためにあらためて実物調査すべく、懐かしい普門寺へ向かった。収蔵庫には、棟札をはじめとする木札や『大般若経』などの聖教類、仏像、経筒、琵琶などが保管されている。初めての頃よりも知識と経験が増えており、担当した棟札に記された文字の筆遣いや墨の濃淡、また隅々についての形態などを観察しただけでなく、銘文の書き手の思いまで読み解こうという意欲が湧いた。そうした調査を行っていくと、「仁王門垂木」という史料が目にとまった。垂木とは屋根の裏板を支える部材である。この垂木には寛文八年（一六六八）の年号と共に、「遠州浜松紺屋町」という地名や大工四人の名前が記されているのだが、その墨書銘は垂木と他材との張り合わせ部分、つまり完成した仁王門の外観にはあらわれない箇所隠れていることを知った（山岸常人「建築調査（普門寺関連の歴史的建造物）」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第140集 普門寺旧境内―総合調査編―』）。まさに歴史を下支えした人々の生きた活動がよみがえったようで、とても興味深い。

棟札類に限らず、普門寺所蔵の文献には、近辺地域に今も残る地名が頻出し、そこに生きた人々の名が数多く現れる。

る。初めて触れた史料は虫喰いが目立ち、十分に読める状態のものではなかったが、それでも「船形山」など普門寺に関する単語を見つけると嬉しく、史料調査の楽しさに触れることができた。研究する

このことは原本調査によってすぐに実感できた。普門寺とともに歩んできた地域の歴史を読み取ることができる、これが普門寺文献の特徴なのであろう。

「普門寺と国境のほとけ」展初日に観覧した。入り口に大きく飾られたタイトルパネルに「協力 愛知県立大学日本文化学部歴史文化学科」と記されているのが目に入った。それ以上に気持ちが高揚したのは、私たちが担当した部屋に入った時である。博物館展示の場で、キャプションを付された実物が目前に陳列される姿を前に、あらためて新鮮な目で文化財を見た。気恥ずかしさと誇らしさが入り交じった思いを抱きつつ、キャプション作成に取り組んだ悪戦苦闘の意味をかみしめた。思わず自分の担当した史料に駆け寄りたくなったが、心を落ち着かせるべく順々に回ることにした。五つある展示室の中でも特に目を引いたのは、第四展示室である。足を踏み入れた途端、目に飛び込んでくる仏像。普門寺本尊「木造聖観音立像」をはじめ、十二世紀に製作された木造阿弥陀如来坐像や木造四天王立像など、貴重な文化財が展示されていた。手を伸ばせば触れることができそうなほどの距離で、仏像を一周して見る機会は少ないのではないか。この企画展は、文字史料を多く展示する点の一つの特徴だと思われるが、この第四展示室の身近な仏像、絵画、工芸などは、視覚に強く訴えかけてくる。翻って、文献展示の魅力とは何だろうか、一観覧者として平静に考える機会となった。

企画展を開催するまでに、どれほどの時間と労力がかけられたことだろう。普門寺旧境内の調査が豊橋市教育委員会によって本格的に始められたのは二〇〇四年である。それから一〇年あまりの調査を経て、報告書が刊行された。これまでに多くの人々が調査に携わり、力を尽くし、成果をこつこつと積み上げてきた。私たちが関わらせていただいた期間は短いにもかかわらず、普門寺調査とともに成長したという思いがある。愛知県立大学中世史研究会の先輩方が積み上げてきた成果と想いを私たちがつなぎ、在学中にこのような集大成ともいえる企画展に関わることができたことにも、感慨を覚える。学びを受け継ぐこととはどういうことか、深くかみしめているところである。

(4年生・岩田侑里香、長谷川奏、坂真里佳)

三 普門寺の文献史料

1 普門寺所蔵文献の特色

普門寺には数多の文字史料が伝来する。『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第141集 普門寺旧境内―総合調査編―』（二〇一六年、豊橋市教育委員会）第二章文献調査「五、聖教・古文書目録」には、通し番号1024までとなっている。大部な『大般若経』が一括記載されているなど、実際の点数はさらに多い。それら全体の中から、特徴的なことを述べてみたい。

普門寺所蔵文献は、ほとんどが近世の文書や典籍であり、中に十二世紀から十六世紀の中世文献が散見される。数量としては一般的な紙本文献が膨大だが、木製素材の木札文書が目立つことは、形態上の一特徴である。また、内容上で相関連する木札と紙本の古文書もあり、古文書学としても研究すべき事例だと考えられる。

たとえば、十二世紀には、本尊の近くに木札の寺法（永暦二年僧永意起請）が掲げられ、寺に集う幾多の人々の目に触れた。のち、戦国の兵火に巻き込まれて伽藍・領地ともに衰退した普門寺は、十七世紀に再生した。この時、再興に奔走した唐僧昶深によって、寺法全文は料紙四枚に書き写され、もとの木札は本尊宮殿（厨子）の内部に納められた。寺史の二大画期に、それぞれの事情で起請が重視され、木札と紙本の二つの形態で作成され、伝えられたのである。

中世の普門寺は、地域に生活する住民と結びつくことによって成立した。十二世紀の寺法は、地域社会の結束を促進するために制定された。したがって、寺院史料を読み解くに際しては、背景にある地域住民の意志を無視することができない。地域が団結するために、世界宗教たる仏教の「和合」の精神をかりて、寺法を作成した。新たな地域づくりという課題に直面した人々の著しい主体性こそ、書面を作成する大きな動機である。



黄檗版『大般若経』（一部）

普門寺は、十五世紀末までに衰微していたようだが、十六世紀になって『普門寺縁起』が作成された。寺が歴史を回顧するとは、いかなることであろうか。縁起の内容には、権力者と関わる事績に加え、里山の用水資源や地勢風土など近隣の生活地域との密接なつながりに触れられており、のちの時代の地誌につながる趣がある。また縁起には音読するために訓点が付されており、使用痕として料紙の摩耗が確認できる。普門寺で読まれただけでなく、場合によっては持ち運ばれて声に出して人々に披露されたことも想像される。

仏教の経典類も歴史を語る。現存する十七世紀後葉の黄檗版『大般若経』六百卷（一部を欠く）は、昶深による普門寺再興事業の一部として導入された遺品である。それぞれの巻末に加えられた奥書によると、普門寺を取り巻く地域、しかも三遠国境をもまたいで出資者を募り、京都の版元から購入したという。具体的には、普門寺膝下の雲谷村、吉田城下町、二川宿、遠江国中之郷村、白須賀宿、新居宿などで施主を得たのである。雲谷村では夏目と戸田の名字が多く、今に続く地元在住者だと考えられる。吉田城下町では商人や農民が多い。また、普門寺の縁者であるらしい下総国の宇田川氏も見える。かつての普門寺領だった縁ある地域や、今の普門寺末寺が存在する地を選んでいるらしい。再興事業に賭けて各地に向く昶深の姿が想像される（上川通夫・井上佳美「史料紹介 普門寺（愛知県豊橋市）所蔵黄檗版『大般若経』について」『愛知県立大学日本文化学部論集（歴史文化学科編）』第一号、二〇一〇年）。

黄檗版という当時最先端の装丁で調卷された仏典が、あらためて地域とともに歩もうとする普門寺の復興に役立てられる。全六百巻の『大般若経』が普門寺に揃うと、寺の復興を宣言する大般若会が再現され、広く地域の人々を惹きつけたであろう。インドで誕生し、中国で漢訳された正統仏典を読み上げる声が響くなか、世界を流伝した普遍思想に浸ることも可能となったであろう。

普門寺は、真言密教の作法書や教義書などの聖教類を蓄積した。現存書の多くもまた十七世紀に各地から収集されたもので、近世寺院としての普門寺復活を裏づける重書となった。三遠両国はもとより尾張国の真言寺院のほか、高野山、根来寺、醍醐寺のような有力真言寺院の僧からも伝授されている。たとえば、十六世紀半ばに書写された『四座講式』は、もとは十三世紀に明恵が考案した法会次第である。その写本が、高野山僧の手を介して十七世紀後葉に昶深が入手した。その後、十九世紀初めには修繕されており、寺院の本領たる宗教活動を継続したようすを想像させる。仏事の実施にまつわる文献に、普門寺史の内実が具体的に刻印されているのである。

普門寺所蔵文献は、宗教活動や経済活動に関する史料ばかりではなく、蔵書の内容は多様である。たとえば近世に刊行された『論語』『孟子』『中庸』『春秋』『易経』『文選』なども目立つ。出版の時代としての江戸時代に、江戸、京都、大坂、高野山などで出版された書物を、普門寺も入手したのである。しかもそれら豊富な書物群は、決して購入されただけではなく、活用されていたことが、原本の状態から実感される。あるいは訓点を付し、あるいは朱書きを加え、時には折り癖がついていたり、葉とおぼしい木の葉が挟まれていたりする。普門寺所蔵文献の大部分を占める近世文献のうち、世俗書物についての研究は多く手つかずである。しかしここには、出版文化の発展とその受容拠点としての寺院という、近世文化史の重要な局面を知る手がかりがあるであろう。

なお、近世文書も膨大に伝わる。普門寺所領関係の文書や検地帳、棟札、寺誌、聖教など、主要な文書は『中世三河国普門寺領現地調査報告Ⅰ（豊橋市雲谷町編）』『同Ⅱ（豊橋市岩崎町編）』での紹介を踏まえて、『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第141集 普門寺旧境内―総合調査編―』に翻刻された。同書に収められた服部光真「近世の普門寺」は、それらを駆使して近世寺院としての普門寺再生と展開を、地域社会史として叙述している。その成果は服部氏の構想によって豊橋市美術博物館企画展示の一室にあてられ、図録『普門寺と国境のほとけ』第五章「普門寺の再生―僧昶深の近世復興事業」として記録されている。今後の研究展開にとっての拠り所となるはずである。

近代に入って、たとえば明治七年（一八七四）の『農業三事』や、明治十年の『日本地誌要略』、また「此度神奈川

表英国軍艦教艘渡来」という記述で始まる『英国軍艦渡来記』などは、流動的な新時代を生き抜くためにさまざまな情報収集し、あるいは書き留めたものであろう。人々はその後、一方では『鎌倉三代記』などによって日本の歴史を、「欧州地図」などによって地球大の世界を認識する。さらに、小学校や中学校の理科、地理や歴史の教科書も持ち込まれた。普門寺所蔵の近代の書物は必ずしも多くない。そのことは、印刷文化や学校制度などが一般社会に拡がったことと無関係ではなからう。

普門寺史の一端は、寺外の史料から知られる場合もある。『瀧山寺縁起』、『大福寺御堂供養記』、石巻神社『大般若経』奥書、広島市草津八幡神社所蔵『大般若経』奥書、称名寺聖教、真福寺聖教などに、断片記事がある（上川通夫「国境の中世寺院―三河国普門寺―」愛知県立大学日本文化学部歴史文化学科編『国境の歴史文化』清文堂出版、二〇一二年）。山寺を結びつけるネットワークの存在など、近年進展しつつある山寺研究にとつての代表事例になるであろう。

（大学院国際文化研究科日本文化専攻博士後期課程・海老沢和子、加藤正賢、同博士前期課程・羽根田柁稀）

2 普門寺史料と中世史研究―いくつかの事例から―

（1）永暦二年（一一六二）僧永意起請木札

一九九八年、普門寺の現本堂の宮殿（本尊厨子）から、住職らによって三枚の木札が見出された。その一つが「僧永意起請木札」である。起請とはものごとの発起を将来に向けて誓う書式であり、永意起請は、船形山に営まれた山寺の再生出発を志向して定めた寺法である。三箇条の事書きと本文からなるが、発見された時に上半分は欠失していた。そのため、二〇〇七年に学術調査が始まった当初は、全文を知ることが不可能だと考えられた。しかしその後の、愛知県立大学中世史研究会による調査の過程で、延宝七年（一六七九）僧昶深筆「僧永意起請写」が見出され、そこには全文が完全に写し取られていた。近世写本によって中世原本を復元すると、見事に内容が理解できた。復元された全文は、『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第141集 普門寺旧境内―総合調査編―』に拠られたい。

起請全体には経典や俗書が多く引用され、戒律の順守を基準に、争い、殺生、窃盗、女犯などの禁止を定めている。ここにおいて最も注目すべき箇所は、第一条に記されている「和合」の精神であろう。和合とは平等に結束する集団やその状態を指す仏教用語である。この理念を永意が強調したのは、当時の普門寺近隣の地域状況が密接に関わっていると考えられる。

十二世紀には、船形山麓の住民は、地縁の村落、いわばあらたな地域社会を形成しつつあった。その団結を実現する方法として、まず住民の近親者を寺僧として送りだした。寺僧たちは、船形山に営んだ院坊に普段は分属しつつ、一寺の仏事などでは本尊の前に集合する。寺僧の背後には、その出身地の住民が生活しており、必要に応じて恒例・臨時の仏事に集まることができる。つまり、このような構造をつくることで、地域の結集をはかるためにこそ、山寺の再生が求められたのではないかと想像される。また、船形山からの湧水は山麓を潤し、一方で住民の生業は寺院経済の基盤となった。武者の進出と自然環境の厳しさが絡まる中世初期、権力に抗い生活の基盤を守るため、寺僧や山麓の住民らの結合が必要であり、その行動指針として「和合」の宗教理念が用いられたのではないだろうか。

この起請木札について、史料や文化財として見るだけでなく、掲げられていた歴史の現場を具体的に想像するよう、感性を研ぎ澄ませてみたい。十二世紀に営まれた本堂の遺跡(元堂跡と呼ばれている)は発掘調査で確認されている(『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第140集 普門寺旧境内―考古調査編―』)。この新設本堂の本尊近くに、起請が掲げられた。実物観察で確認できる釘穴は、打ち付けられていたようすを生々しく伝える。本尊を背にする起請には、そむきたい権威が感じられたのであろう。このような宗教的な意味だけではなく、仏事に結集する寺僧らの背後に集合する山麓住人たちの形相にも関心が湧く。里山というべき船形山は、山麓住民にとつてなじみの共益地であった。また本堂にすぐ近い普門寺峠は、船形山の北麓岩崎と南麓雲谷を結ぶ地元幹線路であるだけではなく、東海道の重要な支線だったようであり、普門寺本堂は行き交う人の通過拠点でもあった。起請が掲げられた二十年後の内乱期には、源氏方の軍勢が何度この地を通ったはずである。その直前には、山門延暦寺から攻撃を受けたという『普門寺縁起』の記述もある。争



普門寺領四至注文写木札

いや殺生を禁じる和合の理念を知っている地元の人々が、中世社会の現実とどのように向き合ったのか、考えるべきことが多いように思う。

(2) 仁治三年（一二四二） 普門寺領四至注文写木札

鎌倉時代中期の仁治三年に普門寺四至注文が作成された。正文は残っていないものの、複数の写本が現存しており、その形状と内容の両面において重要である。その一つは正中二年（一二三五）に写された四至注文であり、木製札として作られた。もう一つは、応安元年（一三六八）に木札から写された紙本の四至注文である。その追記によると、正中二年の木札が開帳された機会に写しを取ったのだという。

船形山寺として古代に出発した普門寺は、十二世紀半ばの再生期に、国衙領内の雲谷（現在の豊橋市雲谷町周辺）と岩崎（現在の豊橋市岩崎町周辺）とを主要な基盤とした。古代の山寺として、国司による国内統治の一環として存在してきた事実が、新時代の地域基盤の獲得に結びついたであろう。ただし寺領を保証する文書などは残されていない。ところが、鎌倉時代の前半期には、領域支配を保証する四至注文を作成するとともに、その正当性をも強調しなければならぬような、支配をめぐる激しい競合の時代になっていたのである。

しかも鎌倉時代末期には、さらに厳しい事情が現れた。雲谷も岩崎も、建武三年（一二三六）からの約六〇年の間、武家たる結城氏の所領とされたのである。正中二年の木札が作成されたのはその十年前だが、すでに支配地を脅かす状況が進んでいたと推測される。正中二年の四至注文木札には、独自の前書きが追加されており、磨滅して判読できない部分が多いものの、普門寺領が初期の鎌倉幕府から安堵を得ていたと記されているようである。それはむしろ、寺領支配の不安定さを意味しているのであろう。

木札の四至に注目すると、雲谷、岩崎をはじめ、鍋山、梅田沢、赤池、毘沙門塚、円尾塚、落合、樹池、平五郎塚、曲松、唐沢、大沢といった近隣の地名が記されている。東は現在の静岡県湖西市の一部を含み、西は現在の豊橋市大岩町の地名を含んでおり、当時の普門寺が支配地だと主張する範囲を知ることができる。普門寺と当該地の関係について研究することは、地域社会を基盤とする普門寺の実態を考察する重要な手がかりである。四至の一部が遠江国にくい込むという主張を重視すれば、行政範囲に制約されつくさない寺領支配の自立性を想起することも可能である（服部光真「中世三河国普門寺領四至再考」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第一六号、二〇一五年）。

四至注文からは、普門寺領は国境を越えた地域社会である、という考えを読み取ることも可能である。この四至注文が、木札として作成され、永意起請とともに本堂に掲示されていたらしいことも、普門寺史と普門寺文献の個性を際立たせている。

四至注文木札は、永意起請木札とともに、近年に現本堂宮殿内から発見された。応安元年の紙本は、普門寺収蔵庫に別置されて伝わった。（3年、下條なつみ、西邑渉）

（3）三界万霊木牌

普門寺所蔵文献の中で木札群は特徴的な存在である。中でも地域史の個性的な実態と普遍的な思想を語る瞠目すべき新出の木札が、三界万霊木牌である。普門寺収蔵庫の棟札にまじっていたが、普門寺文献調査で初めて独自の様式と内容に気づかれたのである。

この木牌は、縦（最長部）一五九・五センチメートル、横二八・四センチメートルという大型の文書木札である。下部にはほぞが成形されており、台に差し込んで立てて使うものである。木牌中央には、大日如来の種子に続いて「三界万霊六趣四生十万含識等」と大書されている。「三界万霊」「六趣四生」「十方含識」という仏教語は、いずれも世俗の立場などを越えたあらゆる生命体を意味している。この木牌を正面に立てる仏事は、普遍的な救済思想を前面に出すものである。

木牌の裏面には、「于時曆応元稔^寅八月六日弘尊注之、船形山桐岡院」と記されている。ただし建武五年（二二三八）を暦応元年に改元したのは八月二十八日であるから、これはいわゆる未來年号である。とはいえそう遠くない時点に作られたものと推定されている。南北朝時代の始まりにあたる時点で、東三河の普門寺で行われた仏事の背景には、実際のむつかしい地域政治の局面を克服しようとする意図があったのかも知れないが、詳しいことはわからない。

木牌の表側、中心部に大書された墨書の左右に、異筆による多人数の名がびっしりと加えられている。それらは、この木牌が再利用された際に追記されたものに違いない。現物を精査した研究によると、二〇段にわたって二〇〇名以上の記載があり、しかも人名には地名が付され、現豊橋市域、静岡県湖西市域を中心に、さらに東方の遠江国引間・見付、ほかに伊勢国山田、越後などの地名が確認されている。

それら人物名には、弘法大師にいたる真言八祖、また裏づけ史料に乏しいものも含めた普門寺歴代住持など、縁起と関係する寺史上の人物名もある。また「普光院殿源義則」（六代將軍足利義教）も見え、幕府政治との関係もうかがわれる。しかしより直接の関係があるのは、東三河を中心とする地域の武士、百姓、僧侶らであるらしい。東三河では、新興領主である戸田氏と牧野氏が対立し、東方からは今川氏が進出の機をうかがっていた。永正十四年（一五一七）ごろには、牧野氏と戸田氏がぶつかる船形山合戦が起きており、普門寺はまともに戦火を被ったはずである。最も注目すべきことは、木牌の人物名に、牧野氏側と戸田氏側の両方が見出せることである。勝者と敗者、生存者と死者、身方と敵、その両方が供養対象者になっている。「三界万霊供養」とはそういう仏事である。判明する人物名の検討から、この木牌が再利用されたのは、天文二年（一五三三）から天文十八年（一五四九）の間だと推測されている（服部光真「普門寺（豊橋市）所蔵年次未詳（中世後期）三界万霊木牌について」『愛知県史研究』第十七号、二〇一三年）。

南北朝内乱期や戦国時代とは、東三河の住民にとってどのような時代だったのであろう。おそらく人々は、戦争ではなく安穩を望んでいたと考えられる。三界万霊供養には、地域の住民も参加したはずである。三界万霊木牌という様式や内容の独自性は、普門寺の新出史料によって初めて学術的に気づかれたのだが、ほかにも遺存例はあるに違いない（服

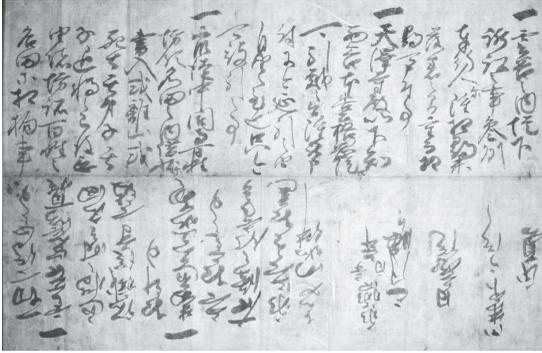
部光真「日本中世寺院史料と地域史研究―三河における史料調査から―」『歴史の理論と教育』第一四三・一四四合併号、二〇一五年)。この木牌の発見は、史料学、思想史、時代像、地域史への再考を促すほどの威力をもっている。

(4) 戦国大名文書

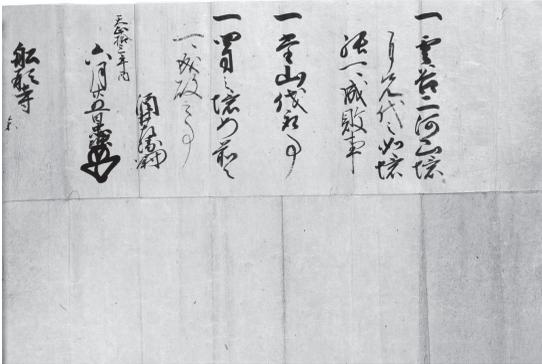
戦国期、三河・遠江の国境に位置する普門寺の所在地域は、東海道にも近い水陸交通の要衝であり、大名勢力間の接触地帯となっていた。しかし地域の歴史は、武士たちの動きだけでは理解できない。普門寺に伝えられた戦国大名らからの受給文書は、時代像を見る目を養わせてくれる。先行研究にも導かれつつ（山田邦明「中世後期の船形寺・桐岡院」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第141集 普門寺旧境内―総合調査編―』）、五通の判物を解説してみたい。

天文十七年（一五四八）十二月、今川義元が東三河を制圧した。するとさっそく、地域の諸寺院から今川氏に対して、寺領支配の確認を申請する動きが見られた。そのような中で普門寺は、翌年十二月十九日に今川義元判物を獲得した。この判物は船形寺・桐岡院の「坂本」にある、雲谷と岩崎が用益する山林について、その不入権を得てきたという寺側の主張を認めたものである。同時に今川側は、「棟別・要脚・諸役」といった負担を寺側にかけないと約束し、寺の維持費用を保障する代わりに、勤行の精励を要求している。実質は、今川方への戦勝祈願を行わせ、普門寺とその地域を自陣に引き入れようとしたのであろう。なお、判物の宛先は桐岡院・船形寺の学頭坊となっている。おそらく文書申請の中心に立ったのはこの学頭坊で、義元は彼の立場を保証して寺の運営を任せただろう。寺院内で統括者の地位をめぐる競合があった可能性もあり、今川義元と学頭坊の結びつきが判物として出され、寺に残されたのである。

天文二十四年（一五五五）には、義元自らを制定主体とする五箇条からなる寺法が出された。これは寺院内部とその支配地の運営方法を再確認したものである。一条目には、前学頭坊が死去し、覚源が後任となったことを記す。学頭坊の交替は、大名からの安堵を得て安定したようであり、学頭側が判物を申請したのである。五条目では、寺領内の百姓ら地元勢力が他の大名の被官になることを禁じている。この頃、寺領の岩崎郷では戸田氏の勢力が強まっていた。百姓



永禄四年今川氏真判物



天正十三年酒井忠次制札

らが他の武家領主に付くことは、今川氏のような大名にとっても無視できない不安材料だったのであろう。

永禄三年（一五六〇）五月、義元が桶狭間で敗死し、子息氏真が今川家の当主となった。翌四年三月晦日に氏真から三箇条の判物が下付された。氏真が新たに寺領を安堵し、船形山とその膝下地域が今川配下であることを確認した。ここでは今川氏の代替わりに判物を下し、普門寺の離反を牽制したのではないだろうか。この判物はかつて義元から下付された判物の内容を踏襲しているが、義元判物を氏真に示したのは寺僧らではないだろうか。

永禄八年（一五六五）、今川方から松平元康（徳川家康）が離反し、織田信長と同盟を結んで翌年に三河をおさえた。

ついで永禄十二年（一五六九）十二月には、船形山桐岡院に徳川家康判物が下付されている。それは、東観音寺など東三河の有力寺院が永禄八年（一五六五）には家康判物を得ているのに比べて、かなり遅い。普門寺近隣では、今川氏の影響の残存などが、徳川勢力の防げとなったのだろう。家康の下知は、寺領や諸役に関するこれまでの権益を認めている。今川義元と同じく、百姓ら地元勢力の離反を警戒しているのであって、家康の支配がすぐに安定したわけではないことをうかがわせる。

天正十三年（一五八五）六月の酒井忠

次制札からも、普門寺周辺地域が情勢不安定であったことが読み取れる。ここでは雲谷・二川の山境を定めている。今川時代にこの山境が設置されていたが、徳川への支配者交替に伴って争いが再発した。そのため、寺側が吉田城主酒井忠次に山境の再確認を求めたのである。

戦国時代という流動的な情勢に、国境に位置する普門寺周辺地域はその影響を強く受けた。大名武士は地域住民の統治に苦心し、地域を代表する寺院は頻繁に交替する支配者への権利申請に執拗な働きかけを行った。英傑の合戦譚として語られがちな時代像とは違い、時代転換の激動をくぐる地域社会からの視点こそ、普門寺所蔵の判物類を読み解く鍵であろう。

(3年、佐々木美聡、玉野愛子)

むすび

普門寺所蔵の文献史料は、中世史関係に限っても、それぞれ学術価値が高い。近世以後の膨大な文献についても、その価値は今後引き出されていくであろう。しかしここで確かめておきたいことは、地域の文化遺産とはどのようなものなのかを考え、それらに対してどう向き合うのか、また大学としてどのように調査や研究に取り組むことができるのか、といったことである。普門寺所蔵文献に接しつつ、折に触れて愛知県立大学中世史研究会において次のようなことを考えた。

地域の歴史は、政治的な覇者や頂点的な思想家、また特殊な体験者など、知名度ある英雄に惹きつけて自己主張されやすい。地域の将来を展望する理念に叶っていれば、そのことも重要であろう。ただ一方、地域の住民が積み上げてきた生活史には、かけがえのない個々人の体験と思いが詰まっているはずである。それらすべてを復元することなどできないばかりか、遠い前近代については偏在するまばらな事例に手がかりを求めざるを得ない。しかし文献史学の威力は、

断片的な史料をためつすがめつ検討し、時代の全体像との関係でその位置づけや意味を見出していくことにあり、可能な限り客観的な歴史の事実を確定することにある。しかもそれは、すんでしまった過去を傍観して終わる作業ではなく、私たちが思い描く将来への希望とのつながりを実感できるような、興味津々の史実を創造的に立ち現れさせる知的営みである。地域史研究こそは、生活者民衆が思い描いたであろう理想実現の可能性を、現代から将来の希望として引き継ぎうる分野である。本論で紹介したような、平安時代末期の永意起請木札に見られる「和合」や、室町・戦国時代の三界万霊木牌に込められた敵身方供養は、民主主義実現を課題とする今日の思いと響き合う。普門寺所蔵文献から学んだことは、地域の文化遺産に対するこのような理解である。

大学内の研究会として特徴的なことは、学部生や大学院生の世代交代が早いことである。参加者の多くは、ゼミを履修する三、四年次の二年間の活動に限られる。しかしそれは、学問としての歴史研究に本格的に挑むかけがえない期間である。歴史学の社会的責任、学問の存在意義、自らそれに二年間を費やす意味、といったことをそれぞれが考えるに違いない。普門寺文献調査はいたって地道なものだったが、時にそのことを考えるきっかけになった。調査の手法をバトンタッチし、調査と研究の成果を少しずつ積み重ねつつ、何とか悉皆調査を終えることができたのは、未熟ながらもそのような思想上の支えがあったからだと思われる。

愛知県域には、すでに知られている文化財は豊かだが、まだ見出されていない文献史料も多いに違いない。大学内の研究会で行える作業は小規模である。また、諸大学や学会、行政がそれぞれ実施している調査・研究があることは確かである。しかし、すでに深刻に懸念されている大規模自然災害の到来を想像すれば、個別で地道な活動では対応できない文化財保護の実務が要求されるであろう。現状では、連携した実働の体制を欠いており、この点についての課題の大きさが痛感される。仮に目立った自然災害が起こらないとしても、地球環境の変化やグローバル世界の不穏に目をつむることはできない。進展、改革、復興、再生、いずれの場合においても、新しい時代づくりの根柢になるのは先人が築いた歴史的伝統であり、特に地域で積み重ねてきた日常生活史の事実であろう。

大学における文献調査は、古文獻の扱いを身につけ、歴史の一部に詳しくなることだけが目的ではない。人文科学の本領を知り、将来に役立てる見識を獲得することである。